

2011/12

## リサーチ

No.115

通巻

172

平成23年12月10日

発行者  
北海道公民館協会  
会長 松藤藤吉  
〒060-0002 札幌市中央区北2西7  
かでる2・7 (9F)  
道立生涯学習推進センター内  
011(271)2825



去る、十月六日・七日の二日間にわたって、第五十五回北海道公民館大会兼全国公民館連合会北海道ブロック大会が、札幌市を会場として開催されました。

あわせて、創立六十周年の記念すべき年を迎えることから、北海道公民館協会六十周年記念事業として開催されたものです。

大会は、かでる2・7を会場に全国各地より一五〇人の公民館職員、公民館運営審議会委員、社会教育委員、関係者の皆さんのが参加しました。

開会式では、北海道教育委員会より高橋教育長の代理として緒方教育

指導監、(財)北海道生涯学習協会専務理事三原和廣様にご祝辞をいただいた他、六十周年記念を祝して、開会式に先立ち恵庭市市民講座コラス、札幌市月寒公民館の「コリデール・コール」の皆さん、又俱知安町羊蹄太鼓の皆さんが記念大会に華をそえていただきました。

また、記念大会では「北海道における公民館活動の果たす役割」をテーマとしてこの度の大震災を通じて、地域の役割、地域の力、地域の再生について、被災地の方々と心をひとつにして、共に課題を解決し、地域住民のきずなを再生产していく場であることを一層確信する大会となりました。



北海道公民館協会会長 松藤藤吉

(中富良野町教育長) 吉

# 第55回北海道公民館大会開催

## ■記念事業

### 北海道公民館協会感謝状贈呈

北海道公民館協会が六〇周年を迎えるにあたり平成十七年度から本協会の立て直しに尽力いただいた方々に感謝状を贈呈させていただきました。

### 「北海道公民館六〇年史」の発刊

北海道公民館協会では、十年前に「北海道公民館協会五十年史」を発刊していますが、この機会に「公民館の原点」を問い合わせし、本協会の役割、課題を明らかにし、北海道公民館の現状と歩みを展望できる「北海道公民館六〇年史」を編集、発刊しました。

編集には、遠藤知恵子・北翔大学前学長他北海道公民館協会関係者が編集委員として参画し、公民館関係者ののみならず多くの方にこれからの方針として、また記念誌としても資料性の高い内容となっています。



### ■「社会教育を再発見しよう～人を育て・つなぎ・地域を創る原動力」

基調講演では、文部科学省生涯学習政策局社会教育課長 塩見みづ枝氏が『社会教育を再発見しよう～人を育て・つなぎ・地域を創る原動力』をテーマに講演し、社会教育の現状と社会教育のめざすもの、そして今話題となっている「無縁社会」への危機感や東日本大震災での取組みから社会教育が「新しい公共」への期待を担う分野であることを強調されました。

そして、国の取り組みと地域での協働とネットワークの必要性を訴えました。

以上が本大会の概要ですが、第一日夜に行なわれた創立六十周年記念祝賀会は、真狩村北本氏によるマジックショーから全国各地から

### ■パネルディスカッション

#### 「新しい公共と社会教育」

続くパネルディスカッションでは、NPO法人・教育支援協会代表理事吉田博彦氏が3・11東日本大震災とその後の問題について触れ、「無縁社会」と言われるほど「絆」を失つた今の社会に、共同体自治の姿や相互扶助の姿が被災地に現れたことの事例を紹介。

特に、原発事故で屋外活動が制限されている福島県の子どもたちを夏季林間学校の活動の様子をビデオで紹介しました。

パネラーとして出席した、文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課長 杉浦久弘氏、和歌山大学生毎日新聞社論説副委員長与良正男氏

### ■グループ熟議

#### 「新しい公共と社会教育」

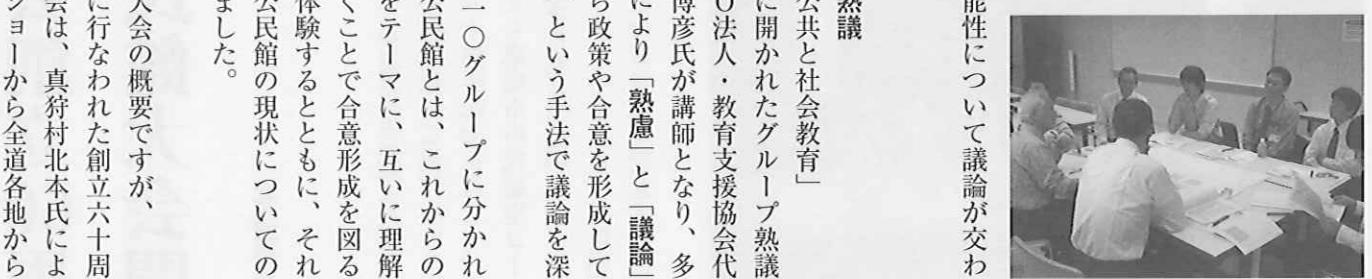
第二日目に開かれたグループ熟議では、NPO法人・教育支援協会代表理事吉田博彦氏が講師となり、多くの当事者により「熟慮」と「議論」を重ねながら政策や合意を形成していく「熟議」という手法で議論を深めました。

参加者は一〇グループに分かれ「公民館、公民館とは、これからの公民館は」をテーマに、互いに理解し高めていくことで合意形成を図る「熟議」を体験するとともに、それが描く公民館の現状についての理解を深めました。

これを機会に北海道公民館の一層の発展に尽力してまいりたいと思います。

本大会の開催にご支援ご指導いただいた、文部科学省、全国公民館連合会、北海道教育委員会、そして講師、パネラー、関係者、参加者の皆さんに心から感謝とお礼を申し上げま

三氏が意見を述べ、今までにできること、しなければならないことを行政、NPO、マスクミ、地域など様々な可能性について議論が交わされました。



寄せられた景品によるbingoゲームが会場を盛り上げ、なごやかな中にも公民館の絆を感じたひとときでした。

本大会では、これまで北海道の公民館が取り組んできた、地域の役割、地域の力、地域の再生という課題について、この大震災を通じて、被災地の方々と共に通の思いをあらためて感じたところです。

パネルディスカッションでの「ふくしまキッズ夏季林間学校」の紹介も意義深いものでした。

本協会は創立六十年を迎えましたが、これからも「集う・学ぶ・結ぶ」という公民館の大きな機能を北海道と地域社会に定着し、継続し、実現していく役割は大きいものがあります。

これを機会に北海道公民館の一層の発展に尽力してまいりたいと思います。



社団法人全国公民館連合会  
会長 鹿 熊 久 三

## 「公民館のもつ公益性」

まず、はじめにご報告いたします。

前号までご紹介しておりました公益法人制度改革について、現在、本会は文部科学省所管の公益法人として活動しております。これは昭和二十六年に発足してから昭和四十年に当時の文部省の認可を得て、法人化して以来続いている体制です。その公益法人制度の大改正があつたのがちょうど三年前の今頃です。「一般

社団法人及び一般財團法人に関する法律」「公益社団法人及び公益財团法人の認定等に関する法律」「一般社団法人及び一般財團法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」が平成八年五月二十六日に国会で成立し、平成二十年十一月に施行されました。一一〇年ぶりに行われた大改正で多くの公益法人で新制度の対応に追われております。本会も例外ではなく、プロジェクトチームを設け、対

応してきたところであり、平成二十三年八月二十五日に公益認定申請を提出するに至りました。その後、細かな対応を経て、十一月十八日にその妥当性について内閣府に設置された第三者委員会である「公益認定等委員会」に内閣総理大臣から諮問され、十一月二十四日に「法律に規定する認定の基準に適合すると認めるのが相当である」との答申が出されました。これは本会の活動が新公益法人制度においても、その高い公益性が認められたこととなります。正式には来年四月一日から「公益社団法人全国公民館連合会」となります

が、引き続き公民館活動に携わっているみなさまのご協力を賜りたくお願いいたします。

さて、本会の活動の肝は「公民館の資質の向上」にあります。これは公民館の持つ公益性が正しく評価されたと言つても過言ではありません。さらに言うと公民館のもつ社会教育機能は健全な地域社会の発展を目指す関係法律の整備等に関する法律」いわゆる「公益法人三法」が平成十八年五月二十六日に国会で成立し、平成二十年十一月に施行されました。一一〇年ぶりに行われた大改正でいることは多くありません。これでは公民館の正しい評価が地方自治・教育行政の戦略に反映されることも

なく、移管によつて、その教育性を否定されたり、廃止によつて、存在そのものが失われるなどの状況に追い込まれてしまいます。

そこで、本会では「公民館の評価」について委員会を設け、公民館が正しく評価され、地方自治・教育行政の戦略の中心に据えられるように検討を進めることとしています。急ごしらえのものを作るわけにいかないので、お時間をいただいた上で、都道府県公連を通じて全国に発信していきたいと考えております。

また、公民館活動に必要なのは地域住民の当事者意識です。この意識が高いところはいわゆる「ボトムアップ」での政策実現が可能であり、民主主義の根幹を担う強い絆が形成されます。この当事者意識を醸成するためには有効な手段が国から示されています。この当事者意識を醸成するためには、有効な手段が国から示されました。さつそく全国の公民館連合組織にお送りさせていただきました。協会の長年にわたる歴史が詰まつた重厚な内容となつております。歴史は先人たちが築き上げた集大成と言えるとともに、今後の歴史は現在を担つている我々で紡いでいかなくてはなりません。同じ時に公民館に携わる者同士、このリサーチをお読みのみなさまには公民館の振興発展にご協力をお願いいたします。

みなさまのご協力をいただいて平

成二十三年度の全国公民館研究集会

が佐賀県佐賀市で開催され、成功裡に終了することができました。まずは謹んでお礼申し上げます。来年の平成二十四年度は滋賀県大津市で開催され、その翌年は北海道富良野市での開催を計画しております。北海道公民館協会のみなさまにおかれてはすでに準備に入つていただいており、本会もまた北海道公民館協会の松藤藤吉会長とともに富良野市を訪問しました。当日は、富良野市長、道府県公連を通じて全国に発信していきたいと考えております。

また、公民館活動に必要なのは地域住民の当事者意識です。この意識が高いところはいわゆる「ボトムアップ」での政策実現が可能であり、民主主義の根幹を担う強い絆が形成されます。この当事者意識を醸成するためには、有効な手段が国から示されました。さつそく全国の公民館連合組織にお送りさせていただきました。協会の長年にわたる歴史が詰まつた重厚な内容となつております。歴史は先人たちが築き上げた集大成と言えるとともに、今後の歴史は現在を担つている我々で紡いでいかなくてはなりません。同じ時に公民館に携わる者同士、このリサーチをお読みのみなさまには公民館の振興発展にご協力をお願いいたします。

みなさまにおかれましては、どうぞ良いお年をお迎えください。

# 全国公民館研究集会

## 佐賀県佐賀市で開催



今年度の「第三十二回全国公民館研究集会inさが」は、「地域再建の活路を拓く『原動力』としての公民館」～活力あるコミュニティづくりに資する社会教育の視点から～をテーマに、十月二十日・二十一日に佐賀県佐賀市において開催されました。

全体会場である佐賀市文化会館には、全国の公民館関係者を始め、生涯学習・社会教育等の関係者約七百名が「葉隱」地、佐賀に集い、実践活動の紹介や研究協議を行いながら、知見と交流を深め、今後の公民館のあり方や方向性を確認し、公民館活動のより一層の充実と発展に向けて熱心に研修しました。

北海道からは前会長の占冠村長 中村 博氏（全公連監事）を始め、道公協事務局の成田みえ氏、江別市社会教育委員の金井征子氏、富良野市教委社会教育係長の上野和広氏、そして道公協事務局長・富良野市の遠藤の五名が一般参加者として、さらに、俱知安町公民館長の矢吹俊男氏が第一分科会の助言者として参加しました。

一日目は、開会行事において全員で公民館の歌「自由の朝」の齊唱後、全公連 鹿熊久三会長の挨拶、文部科学大臣（代）・佐賀県知事の祝辞があり、大会アピール文を全員で確認しました。

引き続き、文部科学省生涯学習政策局社会教育課長 塩見みづ枝氏から「公民館に係る施策の現状と課題」と題して施策説明が行われました。東日本大震災における公民館の取組事例が紹介され、学校支援地域本部事業に取組んでいる地域ほど、避難所における混乱が見られず、順調に自治組織が立ち上がっていたので、地域総ぐみによる子育てこそ、復興には不可欠であるとのことでした。

その後、緊急フォーラム「いま問われる 地域の力と公民館」と題して、避難時や災害復旧時に、公民館は地域住民に対して何ができるのか。防災や減災に役立ち、地域の教育力を高めるために、公民館は何ができるのか。の二点を柱としてフォーラムが開催されました。

聞き手は、佐賀大学文化教育学部長 上野恵三氏、話し手は、関西学院大学総合政策学部教授 室崎益輝



氏、岩手県宮古市中央公民館長 坂下一美氏、岩手県盛岡市中央公民館長補佐 赤沢千鶴氏。被災した坂下館長が「館長は災害時に避難所の運営を任されるが、想定が不十分だった」と反省点を挙げ、今後は住民の体験をまとめた小冊子の作成に取り組むことを紹介していました。室崎教授は、巨大地震では地域の連携と防災教育が大切である。人と人、昔と今、地域と地域をつなぐ公民館の三つの力を生かし、防災拠点の役割を発揮していくべきであると訴えていました。



事例発表は、京都府綾部市綾部公民館より「地域に息づく公民館」と題して、綾部市で取り組んでいる「綾部に暮らしてよかつた」と言つていただける公民館活動について紹介がありました。公民館運営委員は地区自治会連合会や地域の団体等から四〇名程度を選出し、専門部を組

- 「第一分科会「公民館の運営と住民参画」、テーマ①「住民参画の運営組織づくり」②「公民館運営を見直す評価のあり方」

織して数多くの公民館活動を実施しています。今後の課題として、地域内の様々な団体との連携を進めながら、中・高校生を含む青年層の公民館活動への参加促進、公民館運営審議会の機能強化を挙げていました。

- 「第二分科会「青少年教育」、テーマ①「学校支援の取組と公民館の役割」②「地域における青少年活動の充実と公民館のあり方」



- 「第三分科会「成人教育」、テーマ①「成人の社会参加を促すための方策」②「住民力を活かした公民館の取組」

事例発表では、沖縄県那覇市若狭公民館より「地域」と「新しいコメディティ」をつなぐ」と題して、ともに考える場づくりの発表があり

います。今後、学校、地域、センター間で何が必要かの情報の共有化を学校支援に向けて整えていくそうです。

二日目は分科会が開催され、六分科会に分かれて事例発表を基に、熱心に意見交換を行いました。

各分科会名と研究テーマ等は次のとおりです。

ました。若狭公民館はNPOに一部業務委託をしています。既存の地縁組織に属さず、公民館を利用するこどが少ない住民への働きかけとして広報活動に入れており、NPOと連携することにより、地域や社会の課題解決に向け共に考える場としての講座を企画実施しており、地域における生涯学習の拠点施設として「知」の共有と蓄積を心がけています。

○「第四分科会～高齢者教育」、テーマ①「高齢者の生きがいづくり」②「社会の変化に対応した高齢者教育」

事例発表では、青森県青森市中央市民センターより「障害者のための生涯学習について」と題して紹介がありました。市民センターでは知的障害者、聴覚障害者のための生涯学習として、「青年教室」をそれぞれ開催しています。この教室は、昭和四十年代に公民館を会場として手話講座が多く開催され、手話を習得した人たちが、障害者との交流を望み、聴覚障害者も一般の方との交流や実生活に必要な知識・技能を習得することで社会適応性の伸長を図ることを望むようになり、昭和四十五年に「ろう青年教室」が開催されたこと支援と協力をいただいています。老人クラブ会員が学生として多く参加しているそうで、色々な方々に参加してもらうことが今後の課題となっています。

事例発表では、佐賀県佐賀市嘉瀬市民センターより「障害者のための生涯学習について」と題して紹介がありました。市民センターでは知的障害者、聴覚障害者のための生涯学習として、「青年教室」をそれぞれ取り組んできた様々な事業を「まちづくりの視点」で総括し、地域の現状や課題等を改めて見直す機会と捉え、さらなる地域活性化を促進し、公民館としての機能の充実を図る目的で実施しています。さらにKSV（嘉瀬小学校ボランティアネットワーク）が、小学校を拠点として、地域の諸団体、住民、学校、公民館が一体となり「子どもや小学校」の支援活動を行っています。

平成二十五年度の大会は富良野市の開催となります。来年度の『第三十四回全国公民館研究集会』は、平成二十四年十月十一日・十二日に滋賀県大津市で開催されます。財政状況が苦しい地方自治体ですが、多くの公民館関係者が参加されるようお願いいたします。

平成二十三年度優良公民館表彰式の開催となります。来年度の『第三十四回全国公民館研究集会』は、平成二十四年十月十一日・十二日に滋賀県大津市で開催されます。財政状況が苦しい地方自治体ですが、多くの公民館関係者が参加されるようお願いいたします。

平成二十三年度第三回役員会平成二十四年二月十七日予定

平成二十四年度総会平成二十四年四月二十六日午後一時予定

・公民館担当職員研修会平成二十四年七月六日（金）予定

・第五十六回北海道公民館大会平成二十四年十月四日（木）、五日（金）

・道南胆振管内壮瞥町にて予定

・第五十六回北海道公民館大会平成二十四年十月四日（木）、五日（金）

・道南胆振管内壮瞥町にて予定

第五五回北海道公民館大会講演  
「社会教育」を再発見しよう～人を育て、つなぎ、地域を創る原動力～



文部科学省生涯学習政策局  
社会教育課長 塩見みづ枝

一、社会教育課長になつて約一年の感想

社会教育課長になつて、自分が社会教育課長という仕事をしていると公務員以外の民間企業などに働いている人たちに話した時に、社会教育ってなんですかと聞かれます。社会教育とは実は、こちらが説明をしようとするとき、中々難しいところがあり、たとえば、公民館とか図書館、博物館など学校以外の学びを支えることが社会教育なんですよと説明しますが、聞いている方は本当のところがよく分からぬといふ印象の話になってしまいます。

二、社会教育行政の現状  
～データーが示す厳しい現状～

地方公共団体における社会教育費の推移では、地方教育と総額全体も右肩上がりという状況です。教育費全体も減つてきていますが、社会教

育費の減り方というのが、全体の減り方を大きく上回る減り方で、全体が平成十一年度から二十一年度十年間で約十一%減っている中で、社会教育は三十二%減っている現状です。

社会教育施設の現状では、公民館の数は、現在、全国で約一千六百館で、

段々減つてきています。公民館職員数の推移はここ数年減つてきていて、非常勤職員が増えてきている現状です。

社会教育主事の人数と配置率の推移は、大きく下がっています。社会教育主事のいない市町村がかなりの数になつてきています。

社会教育主事の自己認識について

は、やりがいがあるとか楽しいと答えた社会教育主事は八割を超えており仕事全体に対するやりがいは多くの方がもつています。社会教育を取り巻く状況というには暗い状況ばかりではなく、各地で社会教育の優れた実践をたくさん行い、成果をたくさんあげているところがあります。

社会教育振興への気概のようなものが伝わってきます。

三、そもそも社会教育の目的ってなんだろう？

社会教育の目的は何だろうと考えざるを得ないわけですが、教育基本法では「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行なわれる教育は、国及び地方公共団体によつて規定があります。社会教育法では「学校の教育課程として行なわれる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行なわれる組織的な教育活動」を社会教育と規定があります。

・「公民館の設置運営について」

ました。

戦後の公民館を構想してつくつていくときの中核になつた寺中構想の理念の部分が、昭和二十一年七月に出された「公民館の設置運営について」という文部次官通牒の中で示されています。公民館というものは、常時住民が集まつて交流を深める場であり、幅広い文化教養の機関であり、地域における文化団体の本部となり、また、団体が連携して地域振興の底力を生み出す場であるとされています。社会教育のそもそもの出发点といいますか、当時のそうした社会教育振興への気概のようなものが伝わってきます。

・「無縁社会」への危機感

今の世の中というものが、滑り台社会になつてているのではないか。

いつたんレールを外れたり人とのつながりが一回切れてしまつたら、滑り台を下つて底まで一気に落ちてい

くような、そんなだれも手助けしてくれない状況になつてているのではないかという問題提起がありました。そうした事柄の延長線上で無縁社会ということも非常に強く昨年言われました。

本当に人が生きていく上で、人と人とのつながりというのは、何重にも構造があつて、その中で自分はだれかとつながつている社会の中で居場所があつて、誰かの役にたつて生きていると実感することこそが、人が生きていく上で幸せじやないかと思うわけです。

本来、社会教育というのは、そうした社会にしないために人と地域とを結び付けて人がその中でいきいくということを支えるためにあつたはずです。

四、現実が浮き彫りにする「社会教育」の重要性、「新しい公共」のかたち

・被災地での取組み

大震災は様々な社会の問題を浮き彫りにしました。その中で、人とのつながりであるとか、地域のつながりというものの大事さを浮き彫りにしました。

大震災直後、被災地では多くの方々が学校とか公民館とか避難場所に入られて生活することになったわけですが、報道以上に大変な状況があつたと多くの方から聞いています。そんな中で皆さん立上がりて元気をもう一回出そうと原動力となつたのが、人と人とのつながりや地域のきずなの大しさであつたわけです。

例えば宮城県気仙沼市の松岩戸公民館では避難所となり多くの方が避難しましたが、日頃から地域に根ざした公民館の運営が避難所運営にあつて非常に大きな力を發揮しました。地域の方達が率先して避難所の運営を支えるんだということで、中学生も含めて食事の支度やふろの準備など皆さん協力してやつていました。

そうした中で、避難所でパニックの状態の中で色々トラブルもおこりました。がちですが、住民の皆さんが力を合わせて円滑な運営ができていきました。

学校支援地域本部事業がうまく機能していた、元々そうした支援本部の活動があつて、地域の学校が避難所になつた場合と、学校支援地域本部を設けていない学校が避難所となつた場合、それぞれの違いについて、どんなことが起つているのかを宮城県内の小中学校校長四十名に聞き取り調査をしました。

学校支援地域本部を置いていた学校は九十五%が順調に避難所として運営ができ、地域での日頃から応援した方達が中心となつて、学校の先生をフォローしたり様々な活動を自ら進んでやつた結果、避難所としての運営が非常にうまくいったという声をたくさんいただきました。

また一方、学校支援地域本部が置かれていた学校については、困難があつたりした状況が見られていたということで、このデーター一つとっても、日頃から地域での顔見知りのネットワークがあるかどうか、地域のつながりがあるかどうかが非常に大きな力になるのだということをが言えると思います。

福島県の大規模な避難所「ビック

パレット福島」では、たくさんの方達が避難されてきて、運営がうまく進まない中で、ふとしたきっかけで避難所の一角に喫茶コーナーができてそこに集まっている人達が集うよ

うになり、話をし、つながりができるそうです。地域の人達がお互いに話をしてつながっていくことで、自分たちの力で頑張ろうじゃないかという動きが出てきたという話を聞きました。それがさらに広がつて「お互い様センター」というものが避難所の中にできて、被災者同士がボランティアで助け合い、色々なことを自主的にやつていこうという動きが出てきました。草むしりをやつてみようかとか、そこから発展して広報誌をつくつたり、ミニFM局をつくったり、夏祭りをやつたりと、人々の活動が発展していくとの話を聞きました。こうしたことが、本当に社会教育本来の力なのではないかと思います。今回の震災のようないきなりの危機に遭遇したり、それまでのやり方では物事がうまく進まなくなってきたということを、皆さんを感じるようになったとき、にわかに存在感を發揮しなければいけないのが社会教育です。まさに、時代の変わり目、転換期こそ社会教育の出番なのです。

・「教育」の殻を破つて他分野と連携・協働する

新しい公共を実践していくためには、それぞれが一人前の市民としての自覚と能力をもつていかなければならぬということが、大前提にあるわけです。新しい公共というものは、一人でつくれるものではないわけで、多くの人々と連携して仲間をつくって担つていかなければいけません。

そうしたことを考えると、まさにこうした新しい公共を担つていく、その親のような役割をするのが社会教育だと思いますし、社会教育とい

うものはそういう自覚を持つて取組んで進めていかなければならぬものだろうと思ひます。社会教育を新しい角度からもう一回やつていこうという時に、教育の殻をまず破るということが一点、それからもう一つは自主性、持続可能性というものをキーワードとするべきではないかということです。

- ・公民館、公民館職員には、首長部局やNPOからも頼られる地域の学びの拠点、コーディネーターに！

社会教育の良さは、人を育てるところにあります。学びを行なつていては、場とそれを支えて応援していくには、場とそれを行う人が不可欠です。それをする場がまさに公民館であつたり、公民館職員の皆さんです。人は単に学習すればいい、学べばいいといつても、一人で学んで一人で行動することは中々出来る事ではありません。

優秀な社会教育主事、公民館主事の皆さんのが仕事ぶりを拝見していますと、公民館で趣味、教養の講座をやってその人自身は嬉しいかもしれないが、そんなものを税金を使って実施して何になるんだろうかと批判されることもあるわけです。

というのは、それだけで場を終わらせてしまうのではなく、それを持続的な活動としてどうやつてつなげていくかとか、それを地域にどうやって還元していくかなどを考えて取組んでいますし、そうしたプロのノウハウをもつてています。

### 六、文部科学省としての取組み

- ・学校・家庭・地域の連携の推進学校支援地域本部や放課後子ども教室を通じた地域コミュニティづくり

文科省としては何をやつていいけるのか。始めが、学校・家庭・地域の連携による教育支援活動です。学校支援地域本部事業や放課後子ども教室など、放課後の活動の場、学習の場を地域の皆さん之力を借りてつくっていくという活動です。

皆様の努力で地域と学校との関係が変わってきたと我々も実感しています。また、学校全体がこの取組みを通じて良くなるわけではなくて、地域の皆さんも活動に参加することによって、色々な新しい生きがいを得られたり、地域のネットワークができたり、コミュニケーションが活発になつたりと、色々な効果が出てきています。

今、社会教育は正念場を迎えていきます。

社会教育の価値を發揮して、それ

- ・地域の社会教育推進の新しいモデルづくり「社教プロ」「新しい公社」型学校、指導者育成

人間は社会的動物だと言われていますが、本当にそのことは社会教育の仕事を通じて、身に染みて実感するところであり、人が生きていく上で人とのつながりというものは不可欠なわけです。

そうしたことを支えていく社会教育のあり方というものを、これから新しい形でもう一回考えて進めていくという観点で、これまでにない、例えばNPOとか学校、公民館、図書館、博物館などが連携して、地域課題を新しい手法で解決していくための事業を応援するプログラムとして実施しています。

それから、社会教育の指導者の資質向上ということで、研修事業を引き続き実施しています。

こうした、人が生きていく上で必要な大切な仕事を社会教育が担っているということを、改めて誇りに思つていただき取組みを進めていくだければと思つています。

公民館には是非地域の居場所、活性化の拠点となつて進めていただけたいと思っています。



を理解して必要性を認めてもらつてこそ、市民から広く認知してもらえる社会教育になつてていきます。

人間は社会的動物だと言われていますが、本当にそのことは社会教育の仕事を通じて、身に染みて実感するところであり、人が生きていく上で人とのつながりというものは不可欠なわけです。

そうしたことを支えていく社会教

育のあり方というものを、これから

新しい形でもう一回考えて進めてい

かなければならないところに来てい

ます。

## 公民館活性化のために必要なこと

～使い尽くされた言葉ですが、やはり公民館には“絆”が大事～

新居浜市教育委員会社会教育課長 関 福生

### 一、はじめに

公民館が創設されて既に六〇年が過ぎた。人生でいえば還暦を過ぎたことになる。

曆が還り、ちょうど原点を見直す良い機会なかもしれない。

公民館の存在意義は何なのか、そのことに対する意識なしには、公民館は近い将来削減の憂き目に遭うのではないか、そんな心配は決して杞憂ではないと思う。

真剣に、私達は、公民館の将来像、理想を追い求める必要がある。公民館は、特定地域の実態に応じた対応が求められた施設である。

全国共通の護送船団方式の取組みでは成果が期待できないものである。

北海道には北海道独自の歴史があり、先人が築いてきた文化が形成されている。それは、我々の四国にもある。当然、住民意識も北海道流があつて然りである。その基盤の上に公民館や地域社会が成立しているのだから、その独自性は尊重すべきである。

しかし同時に、ガラパゴスになつてはいけない。いつの間にか鎖国状態になつてゐる公民館が多いと言う実感がある。

自分の姿はなかなか見ることはできない。自分を映す鏡が必要になる。

自分流はプライドを育むメリットはあるのは確かであるが、時に独善やマンネリを招く。その危険性からまぬがれることは、むしろ熱心な地域、元気な地域ほど難しい。

その危険を回避するには何が必要かとすると『交流・関係性』といつたキーワードが浮かび上がってくる。自分達の活動を客観的に眺めるために、自分達以外の他者との接点を作り、常に新しい刺激を注入することができればそのリスクを回避できると思うのである。

それには、公民館研究大会や各種研修会への参加も一定の成果があるのだが、敢えて、自らが訪問し、彼の地で志を持って活動している人々と対話することが最も重要であると思つてゐる。

日頃元気な活動に取組んでいる地域同士の交流場面は見ていても楽しいものである。

それぞれが自分達の自慢を誇らしげに語りあう。見ようによつては、自分達が一番だと言ひ合う姿は不思議である。しかし、お互いの『志』

が通じていれば喧嘩にならないのです。フォーマルな懇親の場がインバウンドの如きのように花が咲くのである。日本全国至る所に元気な公民館がいっぱいある。

日本全国至る所に元気な公民館が

(1) 先進的な活動に取組む公民館と交流する。

第一は、私の地元、愛媛県新居浜市立泉川公民館のことである。泉川地域では、公民館の新しい仕組みを作ろうと文部科学省の「学び合い支え合い地域活性化支援事業」を受け取組んだ。住民意識調査、ワークショップの開催によって最終的に地域課題解決型の新たな組織『泉川まちづくり協議会』を創設した。この取組みは、行政からの指示命令ではなく、自分達で一から考え創り出したものだが、それ故に果たして何が良いのか不明で、不安の中を手さぐりで歩んで行つた。その時に大きな力になつたのが、同じような路線で先行している先進地を訪ね、腹を割つた話をすることだつた。

昔流に言えば、公民館の道場破りのようなもので、「頼もう！」と門をくぐつたのである。

完膚なきまでに打ちのめされることも予想された。「あそこは違う。」という一言でみんなが逃げてしまふことも心配された。しかし、その訪問に参加した泉川校区の有志はそこから何かを吸収しようと多くの議論を行なつたのである。そこには、これまでの旧態然とした仕組みに対しての不満もあつたのかもしれないが、少しでも良い地域にしていきたいという情熱がみなぎつた緊張した雰囲



それらがつながつて、ざつくばらんに情報交換し、不安や悩みを出し合つネットワークが生まれることが、切磋琢磨のムードを生みだし、公民館活性化につながつと信じている。

二、私のささやかな体験から

ここでは、私の体験談を三点、皆さんに情報提供したい。

公民館が孤立することなく結び付くことの重要性を教えてくれた同志

ただきます。

気が生まれたのである。「学びはまねで」ということがよく言われる。真似ることは決して悪いことではない。一からすべてを創造できる人なんかそんなにいるはずがない。

しかし、すべてをコピーしようとしても無理で、そこには地域に合わせるために翻訳作業が必要なのである。自分達にカスタマイズさせることができれば移入すれば良いのである。公民館活動、社会教育活動に特許などないはずだ。

公民館仲間においては、どんな情報もオープンだと信じている。

成功談だけじゃなく、失敗談も語り合えるのが公民館仲間じゃないだろうか。少なくとも、私はその関係性の中で育てていただいた。

そして今は、自分がいたい恩を誰かに返すこと『恩送り』が自分の務めであると思っている。

全国の公民館人が仲間意識を持つ繋がることで、公民館の閉塞感は一気に好転するのではないか、最近よく思うのである。

ちなみに、私達が交流に行つた相手は香川県高松市三谷コミュニティセンターだった。

今は、住民の意見を反映し、子どもから高齢者までが活動する新しい施設に生まれ変わったこの施設は公民館ではない。しかし、それは制度上の名であり、そこで行なわれてい

る活動は紛うことなく公民館活動なのである。

郷土を興す喜びを住民みんなが共有しながら、コミュニティセンターに集い、どうすれば三谷という地域が良くなるか、みんなが幸せになれるとがを考え、実践しているのである。

ここでは、コミュニティ協議会という組織が受け皿になり指定管理者としてセンターの管理運営を担っている。職員の人事権も協議会が持っているのである。これは、従来の公民館の考え方から外れるかもしれないが、センター長は自主的に社会教育

主事講習を受講した女性で、地域の一員として、みんなが主役になつて活躍できるよう演出するファシリテーター役に徹している姿は、現代の職員の理想と思う。また、社会教育法二十三条の縛りはないので、ここではどう焼きを開発、近所の農作物を駐車場で販売するなど、コミュニティビジネスの萌芽がみられる。

その収益金、様々な助成金、自治会費などを一元化し、住民総会において事業や予算を決定するシステムは、泉川校区にとつてはまさに目から鱗が取れる驚きであった。真似はできないが、こんなやり方もあるということを知ったことがその後に繋がるのである。

その後、泉川校区には三谷に追いつけ追い越せの気持ちが高まり、そ



の結果が新しいまちづくりの仕組みのスタートとなつたのである。同時に、三谷にとつては泉川校区のボランティア意識の高さが刺激となつたようで、国道のアダプトプログラム、学校支援地域本部事業をはじめとする子どもとの関わりについて研修にやって來ることになった。

やはり交流は一方通行ではなく、相互交流がよいと思う。

それ以降、泉川の子ども達は三谷地区で行なわれる子ども駅伝に参加し、親交が続くのである。点と点がつながれば線になる。線がつながれば面になつっていく。ネットワークとは不思議なもので、同じ思いを持つものが不思議と繋がり、繋がった相手のつながりを自分も共有できるといふことで、拡がりは無限大になるのである。

愛媛県新居浜市別子山公民館、これは平成一五年に合併した旧別子山村で合併時に二百九十九人いた村民が今は二百人を切つてしまい、高齢化率も四八%となつてしまつた地域である。そして、島根県の邑南町、ここは、人口一万二千人はどの町だが、そこに十二の公民館があり、すべてに正規職員が主事として配置されている。まさに社会教育で地域づくりに取組んでいる町である。

ちなみに、島根県は今最も公民館が元気な県の一つで、島根県教育委員会が主催して実施している地域力醸成プログラムは、公開の公民館予算獲得合戦であり、白熱の公民館自慢大会である。そこでもまれる職員は否応なしにスキルアップされるであろう。

(2) 同じ思いを持った仲間と共に取組むこと

二つ目の関係について触れたい。

それは文部科学省委託事業として今年度取組んでいる「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」である。このプロジェクトでは過疎によつて集落の存続に危機感を持つている全国四つの地域がタイアップして事業に取組み、「限界集落」と言わせないよう十年先の地域の未来予想図を熟議によって描き、その実現に向けての方策を探ろうというものである。

愛媛県新居浜市別子山公民館、これは平成一五年に合併した旧別子山村で合併時に二百九十九人いた村民が今は二百人を切つてしまい、高齢化率も四八%となつてしまつた地域である。そして、島根県の邑南町、ここは、人口一万二千人はどの町だが、そこに十二の公民館があり、すべてに正規職員が主事として配置されている。まさに社会教育で地域づくりに取組んでいる町である。

ちなみに島根県は今最も公民館が元気な県の一つで、島根県教育委員会が主催して実施している地域力醸成プログラムは、公開の公民館予算獲得合戦であり、白熱の公民館自慢大会である。そこでもまれる職員は否応なしにスキルアップされるであろう。

そして福島県会津坂下町金上公民館、ここはNPOが雇用する公民館主事が配置されている形態だが、主事が地域に溶け込み、だがしや学校を核に大人と子ども達の交流が豊富である。今後まちづくりを拠点として機能を高めようとしている。

最後のもう一ヵ所は北海道の占冠村である。北海道公民館協会の連携のもとに、村全体で地域を良くする

ために何を為すべきかを議論している。村長、教育長、行政職員を巻き込んだ取組みで、まさに役所の組織文化そのものを変革する挑戦である。結局、村民と役場が一体にならなければ事は起らないという前提で取組んでいる姿は、戦後の公民館創設の理念そのものと重なるのである。

現在、この四つの地域では①住民意識の把握（アンケート）、②熟議ワークショップによる地域課題の集約と課題解決方法の発見そして地域の十年先を見据えた目標設定に取組んでいる。

その中には、地元の大学生や高校生も加わり、様々な面で協力、熟議にも一員として関わってくれている。これまで、講義中心の学習だったのが、熟議という自分の意見を發言せざるを得ない状況に追い込まれることで、当事者意識を持つて地域に関わろうとする住民が増えつつある。このプロジェクトに関わる中で感

じることは、全国各地にはまだまだ沢山の同じ問題意識を抱えた地域があるはずだということである。

しかし、単独で事を起こすことは困難であり、結局関知せずのままでは終わってしまうだろう。

この事業の発端は、たまたま東京で開催されたセミナーに関係者が一緒になったということだった。

研修を発端に、交流会で意気投合

し、一緒に取組んでみようということがになったのである。まさに、「卒業同機」というのだろうか。みんなが同じ事を思っていたがゆえに、よしやろうと一気に動いたのである。

私はたまたま四地域すべてを訪ねる機会を得たのだが、それぞれの地域の思いが余りにも類似していることに驚いた。そして、繋がることで



予想以上のパワーが發揮される「三人寄れば文殊の知恵」に新鮮な感動を覚えるのである。

今回の実証研究は小さな一步かもしれないが、全国各地の過疎に悩み、不安を感じている公民館にとって大きな刺激である検討テーマになることを願っているのである。

### (3) 全国の同志とネットワークを結ぶ事

最後に、三点目である。皆さんは

『公民館海援隊』なるものがあることをご存じだろうか。

坂本龍馬の海援隊と創設の意義は同じだと思っていただいていい。

公民館にとって現代は幕末と同じような状況下である。

公民館体制は江戸幕府と同様に過去の成功体験に引きずられ、先に述べたように鎖国状態で元氣を失いつつある。しかし、それはすべてではなく、地域によつては「志」を持つて、公民館を何とかしようじゃないかと情熱を持つて取組んでいるところがあるのである。草莽として立ち上がりというメッセージが発せられ、全国の公民館のいくつかが立ち上がったのである。しかし公民館の加入率があると思うのである。実際の弱点があると思うのである。実際の対話は公民館の現実から少し離れているきらいもあり、公民館人には関

### 三、おわりに

思いのままに書き綴ってきた。

北海道は四国と違い大きい。お互いがつながるには難しいことも感じている。しかし、繋がる手段は色々とあるはずである。公民館の原点は「集い・学び・つなぐ」にあるはずだ。私はつながることによって本当に多くの仲間に知つてもらいたいと願うものである。

最後に一つ、エピソードを贈ります。「皆さんにもう一度行つてみたいたいと思う町というのがありますか?」今から十年以上前にある人から言われた言葉です。「その理由は何でしょうか?」と重ねて尋ねられました。その方は言いました。「そこに会いたい人がいる町じやないでしょ

うか」私も同感です。  
「あの人には会いたいから訪ねてみよう」といわれたら、まさにそれが公民館人冥利に尽きるのではと思うのですが、如何でしようか・・・

わり難い面もあるのかもしれないが、今だからこそ、公民館海援隊が有効に機能しなければいけないと思うのである。北海道のメンバーは俱知安町公民館（個人名は別だが）だけだつたと記憶している。多くの北海道の公民館有志が加わり、北海道から火がついて新たな公民館活動が燃え上ることを願っている。

## 公民館体制の見直し

～新たな出発～

中札内村教育委員会 教育長 上 松 文 夫

### 一 はじめに

本村教育長（公民館長）を拝命して、三年が過ぎ、その間、生涯学習推進の観点から、学校教育・社会教育（家庭教育含む）の課題が明確になり、現在、多くの関係者と共に、取り組みを進めているところである。その課題の一つは、「公民館体制の見直し」である。

本村のテーマである「自主・自律・協働のまちづくり・人づくり」を目指すために、公民館の果たすべき役割・機能を次のようにおさえ、村全体で共通の意識化を図ることを「見直し」の第一歩として捉えた。

- ・村民のふれあいと結びの場
- ・自らの学びを高める場
- ・文化創造の拠点
- ・多様なネットワークの拠点
- ・地域課題に対応する場

このようなことから、本村の公民館の現状（主体的な活動）や課題などを紹介したい。

### 二 中札内村の概要

本村は、十勝平野の南西部にあり、日高山脈の山裾、その中央部を源と

①自主企画講座（住民による自主的な講座等を補助する）  
ナーレ

④第八回 中札内村北の大地ビエンナーレ  
○実行委員会による企画運営

・フラダンス講座  
・写メアート講座

○全国公募展（応募数 八九〇点）  
・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

②ポロシリ大学（六十歳以上）  
○運営委員会による自主企画  
・学生数 八十八名

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

③年間活動 十四回  
・年間活動内容

・一五八点展示・二四五二名来館  
○関連事業

・主な活動内容

・コンサート（ジャズセッション）  
・絵画教室

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）

・主な活動内容

・大賞（一点 二〇〇万円）  
・美術村賞（一点 一〇〇万円）

・主な活動内容

・優秀賞（一点 三〇万円）等  
○展覧会（二九日間）



中札内文化創造センター

### 三 文化創造センターの主要な活動

本村で公民館の役割や機能を有する中核施設である「文化創造センター」での住民による主体的な活動について紹介する。

- ・文化月間（茶席体験交流・開基 フェスティバル（大人と子ども）
- ・アッピビート国際音楽セミナー
- ・絵画展

- ⑥「共育の日」の取り組み
- 実行委員会による自主運営企画
- セレモニー（十一月三日午前）



中札内共育の日セレモニー（共育宣言）

- ・「共育宣言」
- ・「我が家の三つの約束」発表
- ・各地区青少年健全育成の発表
- ・講演「ふるさとの未来を託す人材の育成」

北の未来塾主宰 河地良一氏

#### 四 中札内村公民館の現状と課題

○現在、本村公民館は、歴史的な

経緯の中で、小規模地区にあり、

市街地には「文化創造センター」

という公民館の役割と機能を有

する生涯学習センター的な中核

施設がある。

○公民館の望ましい体制からする  
と、歴史的な経緯と住民の思い  
など、様々なことが複雑に絡み  
合って、すつきりしない状況に  
ある。

・社会教育委員兼公民館運営審議  
会であるにも関わらず、会議で  
公民館に関する論議が十分でない。

③公民館の役割や機能を着実に果た  
すための人的配置（専任館長・公  
民館主事等）が明確に位置づけさ  
れていない。

・住民のニーズを把握した「文化  
創造センター」を活用した講座  
や教室、グループ・サークル活  
動の活発化を図れない。

○課題解決に向けて

①現在、本村の社会教育施設の整備

計画づくりの中で、公民館の望ま  
しいあり方について、検討している。

・小規模地区にある公民館の名称  
変更と中心部にある「文化創造  
センター」を公民館機能を有す

- 具体的な課題
  - ①小規模地区にある公民館が村とし  
て望ましい体制・状況かどうかと  
いう課題。
  - ・現在の公民館運営が、指定管理  
者であることから、ハード面  
(管理)はよしとしても、ソフト面  
(活動)は十分機能していない  
ため、新たな展開が望めない。
  - ②社会教育委員・公民館運営審議会  
委員の役割等の活性化の課題。
    - ・北海道公民館協会への加入（十  
勝管内・浦幌町だけ）がないこ  
とか、公民館に関する情報等  
が入ってこない。
    - ・社会教育委員兼公民館運営審議  
会であるにも関わらず、会議で  
公民館に関する論議が十分でない。
  - ③公民館的な機能（つどつ・まなぶ、  
むすぶ・つくる・さがす）を充実  
するために、公民館に関わる専門  
的役割を担う人材を教育委員会事  
務局に配置してソフト面の充実を  
図りたい。

#### 五 今後に向けて

①住民の支え合いと活気のある社会  
を目指し、自発的な協働である

「新しい公共」を踏まえ、住民に  
よる自主・自律意識を喚起して、  
主体的な実行委員会などによる公  
民館活動を醸成したい。

②公民館講座・教室については、住  
民の要求課題だけでなく、必要課  
題を把握し、積極的に取り組んで  
いきたい。

③「文化創造センター」内にある図  
書館と連携し、大人も子どもも多  
く読書に親しむ取り組みを強化し  
たい。

る施設として位置付けるように  
していく。

・小規模地区にある施設は、宿泊  
できることから、青少年育成の

場と地区会館として考えている。

・正直な言葉づかいに心がけよう

○我慢することの大切さを教えよう

○ダメなものはダメと叱る勇気を持とう

○自分のことは自分でさせよう

●規則正しい生活習慣を身につけるため  
に

○「早寝・早起き・朝ご飯」を実行しよう

○テレビ・ゲーム・携帯電話のルールを  
決めよう

○家庭での学習習慣を定着させよう

○本を読む時間を増やそう

○あつたかい家庭の絆を深めるために  
一切にしよう

○共に過ごす時間を増やそう

○いつも「おはよう」「ありがとう」を大  
切にしよう

○みんなで家の仕事を分担しよう

○優しい笑顔で大いにほめよう

●自然や大地の良さを伝えるために  
地域の良さを語ろう

○恵まれた四季に親しむ知恵を伝えよう

○食の恵みを知り感謝しよう

●みんなで環境を守り未来につなげよう

○地域のマナーを守り、子どもに生き方  
を示そう

○ボランティア・スポーツ・文化活動に  
参加しよう

○地域の力を学校に活かそう

#### 【資料】

◎「なかさつない 共育宣言」

【地域で子どもたちを共に育てる】

・品格のある大人に育てるために

・正直な言葉づかいに心がけよう

○我慢することの大切さを教えよう

○ダメなものはダメと叱る勇気を持とう

○自分のことは自分でさせよう

●規則正しい生活習慣を身につけるため  
に

○「早寝・早起き・朝ご飯」を実行しよう

○テレビ・ゲーム・携帯電話のルールを  
決めよう

○家庭での学習習慣を定着させよう

○本を読む時間を増やそう

○あつたかい家庭の絆を深めるために  
一切にしよう

○共に過ごす時間を増やそう

○いつも「おはよう」「ありがとう」を大  
切にしよう

○みんなで家の仕事を分担しよう

○優しい笑顔で大いにほめよう

●自然や大地の良さを伝えるために  
地域の良さを語ろう

○恵まれた四季に親しむ知恵を伝えよう

○食の恵みを知り感謝しよう

●みんなで環境を守り未来につなげよう

○地域のマナーを守り、子どもに生き方  
を示そう

○ボランティア・スポーツ・文化活動に  
参加しよう

## 熟議でまちづくり（占冠村公民館の取り組み）

占冠村教育委員会 社会教育主事 竹内清孝

上川管内占冠村では、平成二十三年度に文部科学省が公募した「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」に、全国の四地区

（占冠村、福島県会津板下町金上公民館、島根県邑南町、愛媛県新居浜市立別子山公民館）と共同事業を実施しています。今回は、途中経過となります。その内容について紹介します。

### 大学との協働

この事業は、「社会教育でつくる未来予想図プロジェクト事業～熟議で地域に新しい風を起こそう～」をテーマに、四地区それぞれが、地域の将来像を熟議し策定していきます。地域によって実情が違うことから、各地区の取り組みは多少異なりますが、当村では最初の作業として、地域の現状を把握するため、北翔大学と北海学園大学の協力を得て、地域調査を実施しました。

学生たちが村内（役場・支所・公共施設・観光施設・山菜工場・個人宅など）を訪問しながら、農業者、移住者、商工業者・役場職員・高齢

者など、様々な立場の住民に聞き取り調査を行いました。

なかでも村内二地域（トマム地区・双珠別地区）を重点対象地域とし、懇談会も開催しました。



村外から来たからこそ聞ける、率直な質問が多くあり、参加した住民は、それぞれの生い立ち等を交えて、生活の現状や悩み、思っていることなどを語ってくれました。

学生たちはその内容を感想とともにレポートとしてまとめ、住民の生の声として記録してくれています。学生と一緒に教育委員会職員（兼公民館主事）も聞き取りや懇談会に参加しましたが、小さい地域で、ある程度の住民の顔はわかつていても、どういった思いで一生懸命農業をしているのか、移住者が村でどんなことを感じているかなど、大変参考となりました。

また、北海道大学の小林甫名誉教授にご協力を頂き、「占冠むらづくりアンケート調査」を村内の二地域の



住民と役場職員に配布し、その結果を北海学園大学の内田和浩教授とゼミ生と共に分析していただきました。先日、両教授と北翔大学の谷川松芳教授を村にお招きし、アンケート結果と大学生が行つた地域調査について、役場関係者と意見交換会を行いました。

村長、副村長、教育長ほか管理職、役場各部署の担当者が集まり、調査結果とともに占冠村の公民館事業や社会教育中期計画への意見も交えて説明をしていただきました。

アンケートの結果からは、村職員に対する厳しい意見もありました。しかし、職員からは、「住民として地域活動にもっと参加したい」「地域住民のつながりが薄れてきているのはマイナスだ」などの意見も出され、職員もまた様々な問題や課題を認識していることもうかがえました。この事業は、大学との協働のほかに、首長部局との協働も掲げ村全体

の事業として位置づけています。

村長から担当者まで、職員が一同に会して意見を交換したことは、これまでありませんでした。短い時間でしたが、日々、普段同じ庁舎内にいても知ることのできなかつた各自の考え方や思いが引き出せたのはとても貴重であつたと思ひます。

「住民がつくる社会教育」を目指して

年度までの間、第五次社会教育中期計画に基づき事業を進めてきており、平成二十三年度は第四年次となります。この計画の大目標は「住民がつくる社会教育」です。この目標には、地域での社会教育活動が、官主導型ではなく住民主導で行われ、住民の意見が地域政策に反映されるようなな地域づくりをしていきたいとの思いが込められています。

当村は、人口減など様々な課題を抱えています。しかし、「幸せな暮らし」「住みよい地域」をつくり出すため住民と住民、行政と行政、住民と行政などあらゆる人が、語り合ふことを通じ、共に前に進もうとする過程において、今回のプロジェクト事業は、大きな一步となりました。



した事業が行わされました。このプログラムがさらに住民に活用され、地域を担う「人づくり」に繋がってほしいものです。

中期計画・自主創造プログラムと  
もその内容について検証する時期に  
きていますが、近年、村の社会教育  
委員（兼公民館運営審議会委員）を  
経験された方が、住民活動の核とな  
り先頭をきつて積極的に参加してい  
ることは大きな成果だと感じていま  
す。



査や聞き取り調査で集約した内容を持つて大学生が再び占冠村を訪問し、対象とした村内の二つの地域（トマム地区・双珠別地区）の住民との熟議を行います。

地域課題を絞り込み、各課題に対して地域がどう関わるべきか探り、目指すべきまちづくりのビジョン、五年先、十年先の未来の占冠村について語り合います。住民の思いと大學生の情熱が合わさり、新たな視点から、様々なアイディアが出されることが期待されます。

冒頭の記述のとおり、この事業は全国四地区で行っており、最終的には各地域の事業及び成果の情報を集め、結果を比較検証していくことになっています。この四地区は全国公民館連合会が主催する全国規模の研修会で出会い、「地域に新しい風を起こそう」との思いから、共同で事業を実施することとなりました。歴史や成り立ちなど、それぞれの背景は異なりますが、同じ事業を実施し、情報を持ち寄ることで、多角的な知恵が生まれ地域が抱える課題や問題解決につながればと思います。

事業の途中経過として紹介しましてが、今後の取り組みについても、お知らせができればと思います。